

月

旦

月山

昭和四十九年三月十日 初版発行
昭和四十九年四月五日 三版発行

著者 森 敦

発行者 中島隆之

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三ノ六

振替口座(東京)一〇八〇二 電話一九二一三七二一

印刷 中央精版

製本 中央精版

©1974 ATSUSHI MORI

森 敦

月 山

月山

未だ生を知らず
焉ぞ死を知らん

ながく庄内平野を転々としながらも、わたしはその裏ともいふべき肘折ひじおりの溪谷にわけ入るまで、月山がつさんがなぜ月の山つきと呼ばれるかを知りませんでした。そのときは、折からの豪雪で、危く行き倒れになるところを助けられ、からくも目ざす溪谷に辿りついたのですが、彼方に白く輝くまどかな山があり、この世ならぬ月の出を目のあたりにしたように、かえってこれがあの月山だとは気さえつかずにいたのです。しかも、この溪谷がすでに月山であるのに、月山がなお彼方に月のように見えるのを不思議に思ったばかりではありません。これから月山は、溪谷の彼方につねにまどかな姿を見せ、いつとはなくまどかに拡がる雪のスロープに導くと言うのをほとんど夢心地で聞いたのです。

それというのも、庄内平野を見おろして日本海の気流を受けて立つ月山からは、思い

も及ばぬ姿だったからでしょう。その月山は、遙かな庄内平野の北限に、富士に似た山裾を海に曳く鳥海山と対峙して、右に朝日連峰を覗かせながら金峰山を侍らせ、左に鳥海山へと延びる山々を連亘させて、臥した牛の背のように悠揚として空に曳くながい稜線から、雪崩れるごとくその山腹を強く平野へと落としている。すなわち、月山は月山と呼ばれるゆえんを知ろうとする者にはその本然の姿を見せず、本然の姿を見ようとする者には月山と呼ばれるゆえんを語ろうとしないのです。月山が、古来、死者の行くあの世の山とされていたのも、死こそはわたしたちにとってまさにあるべき唯一のものでありながら、そのいかなるものかを覗かせようとせず、ひとたび覗えば語ることを許さぬ、死のたくらみめいたものを感じさせるためかもしれません。

じじつ、月山はこの眺めからまたの名を臥牛山と呼び、臥した牛の北に向けて垂れた首を羽黒山、その背にあたる頂を特に月山、尻に至って太ももと腹の間の陰所とみられるあたりを湯殿山といい、これを出羽三山と称するのです。出羽三山と聞けば、そうした三つの山があると思っっている向きもあるようだが、もっとも秘奥な奥の院とされる湯殿山のごときは、遠く望むと山があるかに見えながら、頂に近い大溪谷で山ではない。

月山を死者の行くあの世の山として、それらをそれぞれ弥陀三尊の座になぞらえたので、三山といっても月山ただ一つの山の謂いなのです。

標高一九八〇メートル。鳥海山のそれには僅かに及ばないが、東北有数の高山で、豊沃な庄内平野を生みなす河川は、ほとんどこの月山から出ているといっても過言ではありません。赤川は言うに及ばず、最上川もあの肘折の溪谷の流れを入れて大をなしているのです。してみれば、庄内平野がこの世の榮えをみる事ができるのも、まさに死者の行くあの世の山、月山のめぐみによると言わねばならない。このようにして、出羽三山、ことに湯殿への信仰はひとり庄内平野にとどまらず、あまねくこの国に行き渡ったと言えます。

いま、その赤川をさかのぼって落合で大鳥川と別れると、赤川は名川と呼ばれてようやく溪谷の様相を帯びて来る。この名川をさかのぼって大網に至り七五三掛の溪谷と別れば、名川は更に梵字川と呼ばいかえられ、やがては湯殿の溪谷へとなっていくのです。が、いつとなくあたりは広大な山ふところの観を呈しはじめるのです。山ふところといっても、ただ周囲が山である盆地のようなものではありません。そこも山また山のいわ

ばひとつの天地をなし、大綱には大日坊だいにちほう、七五三掛には注連寺ちゅうれんじと称する大きな寺があって、湯殿を背景とする真言の靈域とされ、古くから羽黒の天台とその榮えを競うところとなっていました。

しかし、ただ見れば月山は牛の背に似たながい稜線から、雪崩れるように山腹を平野へと落としている。麓には丘陵が連なっているが、この広大な山ふところをなす前山まえやまというにはあまりに低く、そんなところがあるとも思えません。しかし、村や町には湯殿講でもあるらしく、農閑期には観光バスを仕立てて湯殿詣りに行くようです。しかも、そんなばさまのひとりに、わたしの聞きたいところをなんと尋ねても、

「んだの」

と、頷くだけなので、そうだというのか、そうでないというのかわからないのです。ようやくわかってみると、行きも帰りもひどい「霧で、霧で……」なにも見えず、ばさまもわたしと同様、他人ひとから聞いたことで受け答えをしていたのであります。

それだけに、わたしには幻とも思えるこの山ふところが、蜃気楼のように浮かんて来ることがありました。といって、わたしがこの山ふところ、七五三掛の注連寺ちゅうれんじに歳月を

過ごすようになったのは、そのためばかりではなかったのです。わたしがその寺に行くと言うと、霧でなにも見て来なかったはずのばさままで薄笑いを浮かべるのです。いや、注連寺はいまは鶴岡市のある寺の宰領するところとなっていて、たまたまその方丈に紹介されたのが縁になったのですが、その方丈すらわたしの願いを許しながらも、なんだか薄っすらと笑ったのです。もの好きにもほどがある。顔はまアそんなふうでも、わたしは内心、そこまで落ちたのかと思われているような、蔑みに似たものを覚えさせられずにはいなかったのです。

あるいは、わたしの思い過ごしもあったかもしれませんが。しかし、他人は意外に見ているものだ、こちらも薄笑いをするより仕方のないものがあつたのです。当時、わたしにはあるセンターの実現を意図して、なにかと言って寄こす友人がありました。いつも意図ばかり聞かされていたので期待などしていなかったのですが、どこかでまだわたしを期待してくれているという喜びで、友人にはそれなりの激励をしていたのです。それがいつとはなく返信も跡絶えてしまいました。跡絶えてみるとそれがわたしへの唯一の訪れであり、友人への激励がじつはなすこともない転々の日々を耐えさせていた、わ

たし自身への激励であったことを知らずにはいられなくなったのです。すでに囊中も乏しく、カネのはいるなんのあてもない。いずれ去らねばならぬのなら、そんな寺にもいてみたいという気がして来たのはむろんですが、前途に目算もなく、そんなところならいくらかは食いつなげるだろうとも思ったのです。

教えられたように鶴岡市からバスに乗りましたが、次々に過ぎる庄内平野のおなじような町や村に倦んだのでしょう。落合の鉄橋を渡るころからうとうとし、ときにイタヤの葉の繁みから深い溪流を見たような気がするものの、つい眠ってしまつて大綱に着いたのも知らずにいたのです。いつからともわからなかったが、とにかく山あいの溪谷にはいつて見えなくなつていた月山が、また山の向こうに見える。バス停のあたりには農協の売店があり、閑散な屋並みの切れるやや高みに大日坊らしい寺がある。さすがに、山の氣に触れた思ひはするのですが、わたしの想像していたような靈域といった感じもしないのです。それどころか、いつかここを見たような気がするの、よくある山の村の眺めだったからかもしれません。

路傍には、注連寺もすぐそこにあるというように、角材の道しるべが高々と建つてい

ました。バス道から別れると、ここにも七五三掛の溪谷にはいる溪谷があり、谷底にはぬかって難渋している牛車が見えるのです。しかし、それから先は山奥にしては割とい新道ができています。ただ、谷底に降りて岩に掛けた板を渡ったときは、みな足が速いのか気がつくのだれもないのです。もっとも、ひとり深い溪谷を見おろす新道を歩きながら、バスから夢うつつに見た溪流を思いだしたり、振り返っては杉林の向こうの月山を眺めたりしていたせいかもしれません。

それにしても、道、い、る、べ、は思ひだしたように建っていて、この新道に間違いはないらしいが、だんだん小さな棒グイみたいなものになって来て、ついにそんなものさえなくなってしまう。山あいの向こうからは、送電線の鉄柱の小さく見える山並みが迫って来、新道も尽きてしまいそうな気がするのです。じじつ、注連寺は新道の尽きたところにあつたので、足も疲れ不安にかられていると、ようやく山あいから漏れる夕日に、銅葺きの屋根を輝かしている大きな寺が見えて来ました。しかも、山は暮れるにはやく、そうして寺がもうそこにあるところに来ながらも、辿りついたときは境内もすでに暗く、花がつくられているらしいのに、かすかな香りばかりが闇に漂っていたのです。

あくる朝起きてみると、境内も広く、片隅につくられた花畑は、寺のじさまが手塩にかけたものらしく、種のあるままに蒔かれたようで雑然といろんな花が咲いて、花から花へと地蜂がぶら下がるようにして渡っている。ここかと思った寺のじさまの姿はありません。本堂は去年の雪囲いの木組みが解かれもせず、そのままになっていて普請場のようですが、勾欄つきの回廊のある堂々たるもので、それにつづいてこちらにある二階建ての庫裡も、トタン屋根ながら驚くほど大きいのです。

七五三掛の部落は、寺下から溪谷にかけてあるのでしょう。境内の端に並んだ杉の巨木の根に近く、もうそれらしい萱屋根の棟が覗いている。低くはあるがこうした寺に相應しい広い正面の石段から、ゴロタ石の道を降りるとやはり部落で、木々の繁みの下におなじような萱屋根があります。これが更に降りると二階、三階の合掌づくりの家で、高々と下枝したえだをおろした古木の梢のあたりで抔げた枝葉に、いずれもその萱屋根をおおわれているのです。

「糞くそずつこ、つつこ！」

突然、子供の声がして、かすかに「糞くそずつこ……」と木霊して来るのが聞こえる。モ

ンベもはかぬ頭の大きな小さな野郎ツ子が、そう言ってなにか拾っては投げているので、ゴロタ石の礫かと思うと、礫のようなリンゴの実であります。してみれば、高い萱屋根をおおわんばかりの古木は、驚いたことにリンゴなのです。

子供たちはよく争って、おなじ言葉で相手のじさま、ばさまの悪口を言い、声が大きければ言い負かしたと思ったりしているものです。この萱屋根の家にもだれもいないようだから、この野郎ツ子も置き去りにされて、ウップンを晴らしていたのでしょう。しかも、向こうにも野郎ツ子がいるように、叫べば木霊が返って来る。いまはもうそんな野郎ツ子と言い争う気になって、ひとり遊びをしているのかもしれませんが。

「糞ばっこ！」

更に拾って手を振り上げて、投げようとするのを、

「小さな実だね」

笑ってわたしが声をかけると、野郎ツ子は急に黙って、萱屋根の家にはいってしまいました。それがどうやらただの人見知りと違っている。あらかじめ、教え込まれていたようなところがあって、わたしにはふと思ひあたるものがありました。部落のゴロタ石